

や土佐の志士達が「幕府を倒せ」と騒いでいる場面が多くなつたからです。こうなると次は「幕府と会津を倒せ」となるに決まっているから、「また東北が悪者扱いか」とがっかりする気持ちになつて、「もう、見るのをやめた」という人もかなりいます。別に僻み根性が強い訳ではありません。奥州藤原氏が栄えた平泉は、頼朝に徹底的にいじめられました。戊辰戦争においても、秋田を除く東北全体が賊軍扱いを受けました。「龍馬伝」も最初はよかつたのですが、「倒せ」となる。「東北を主体にした大河ドラマを制作してもらわなければならない」と本格的にお願いしたい気持ちです。

幕末も、出遅れていた東北

私の家は両親とも仙台藩の下級武士の末裔です。幕末の様子をいろいろ尋ねると、京都守護職を命じられていた会津藩だけは風雲急を告げる京都の様子を肌で知りましたが、他の東北雄藩は、「京都で何か騒ぎがあるようだ」程度の認識でした。

幕府が鳥羽・伏見で敗れて初めて、盛岡や仙台などは慌てて視察団を派遣しています。薩長土肥に遅れること約二年、「薩長についた方がいい」とんでもない

きます。大河ドラマでは、武市半平太が道場で門下生とともに血判状に判を押し、「攘夷」を叫ぶ場面がありました。「刀で夷狄を斬るんだ」という主張で、しかし土佐では上士と下士の壁をついに破れる。武市半平太は山内容堂の命令で切腹します。土佐は古い形を引きずつたまま明治維新を迎えます。

さて、裕福だった龍馬は江戸に何度か私費留学をします。江戸滞在中、黒船を見た龍馬は「刀を振り回して攘夷を叫ぶなど、黒船は斬れない」と悟ります。そしていろいろ考えた結果、京都に向かいます。土佐藩士が京都に出ると、大抵長州藩士の子分のようになつてしまふのですが、龍馬はそれを嫌がり、「幕府には勝海舟という人がいて、軍艦でアメリカに行つている。その人に会つて、世界情勢や海軍について勉強したい」と願ひ、勝海舟に会いに行きます。最初に勝海舟の弟子になつたということは、龍馬にとって非常に大きなことでした。龍馬は最後まで「徳川を切り捨てない」という立場でした。「龍馬伝」でも、西郷と桂が倒幕と慶喜殺害を企てている時、龍馬が強く反対する場面がありました。

龍馬は、幕臣の勝海舟からはリベラルな思想を受け継ぎ、一方で西郷隆盛のような器の大きい人とも、桂小五郎のような革命家とも付き合います。立場を超え

い。義は会津にある。会津を応援すべきだ」という論争がようやく東北で起こるので。

テレビも新聞も新幹線も何もない時代です。仙台は飢饉もありませんし酒もうまいし米もとれるので、庶民は太平楽でいました。そこに、ガツンと来たのです。

土佐藩は龍馬が亡くなった後、明治時代には薩長に完全に遅れをとり、その他大勢となつてしまいました。それでも東北に比べればはるかに進んでいます。

坂本龍馬

龍馬の実家は下士階級でしたが非常に裕福でした。ちょうど土佐城が見える所に彼の本家と分家がありました。しかし、上士と下士の間には厳格な身分差別がありました。下士は侍扱いされず、登城も禁止でした。ですから、龍馬は土佐城に入ったことはありません。下士は、上士が通る時は雨の降る中でも道路に腹ばいになってお辞儀をしなければいけない階級でした。

長州では、高杉晋作の奇兵隊のように階級社会を打破する藩政改革が行われ、下士が藩政の実権を掌握しています。土佐もその影響を受け、土佐勤王党が出て

て様々な人付き合った龍馬は、非常に柔軟でバランス感覚があつたのでしよう。

勝海舟

勝海舟の家は、曾祖父が越後から江戸へ出て様々なことをやって富を築き、祖父の代で御家人株を買つて旗本となりました。昔からの由緒正しい旗本ではないため、どんなに勉強をしてもトップには登用されない家柄でした。

勝海舟の父・小吉は大変先見の明のある人物だったようです。当時、旗本で気の利いた人は千葉周作の道場で剣道を習いますが、勝小吉はどこで聞いたか、「剣道だけではない」と考え、息子・海舟を蘭学塾に入れます。そのうち「蘭学だけでも駄目だ。やはり英語だ」と聞いてくると、海舟を英語塾に入れるのです。なかなか凄い教育親父だと思います。今で言う「塾を掛け持ちする中高生」が勝海舟で、剣道・蘭学・英語の三つを学びました。

オランダ語が出来た勝海舟は、長崎海軍伝習所に第一期生として入学します。彼は軍艦操練をしますが、海軍トップにはなれず、いつも二番手・三番手でした。例えば、日米修好通商条約の批准書交換のため、